

高知県久礼における「鰹乃國」の成立以前の地域性

地域振興策への一考察

河 原 典 史

はじめに 地域振興のまえに

地域振興をめぐる行政と地域住民の活動は多様である。高度経済成長期の観光開発や過疎化対策、いわゆるバブル経済期でのリゾート開発とその崩壊後などにおいて、各地ではさまざまな地域振興策が講じられてきた。それらの多くは観光開発であるため、地域振興とは観光開発であるような誤解も招いている。

地域振興の展開とその要因について、地理学的アプローチから分析した研究も少なくない。例えば、半場則行は地域振興策の全国的実態を概説し¹⁾、愛知県を事例にその内容を類型化している²⁾。半場は農業振興による観光開発事業の成功を紹介し³⁾、近年では筒井一信が内発的発展の重要性を説き⁴⁾、中山昭則は自然休養村事業にまで事例を広げている⁵⁾。

地理学から地域振興の実態を論じる場合、施行前後のさまざまな施設の立地展開、土地利用や地域組織の変化などが視点となってきた。その際、以前の基幹産業については、詳述されることはほとんどなかった。それは、既存の産業が衰退したからこそ、新たに地域振興が計られたという紹介程度に終始しているのである。既存産業の維持過程に、新しい振興策の萌芽が垣間みられることも多い。しかし、その実施にあたって、採用された事業とその要因についての具体的な説明はあるものの、それが見送られた事業に関する記述はほとんどみられない。実施されている振興策が好調であると、否定的であった事業プランは再検討する機会を逸するであろう。

採用された地域振興策に隠れて、それが見送られたプランのなかにも、当該地域の歴史と文化に育まれた生業も多いはずである。それらなかには、かつての基幹産業となり、地域の発展において関与していたものも少なくない。採用された振興策ばかりが脚光を浴びるため、過疎化対策や観光開発など地域振興の本来の目的に積極的に参加・賛同できない地域住民が惹起されるかもしれない。かつての基幹産業を担ったという自負を持つ地域住民には、その傾向が強いと思われる。マスコミによって一時的かつ作為的なブームに便乗した場合など、元来の地域文化とはほとんど関係のない振興策が採られた場合には、その危険性がより高まるであろう。つまり、成功裏にある伝統をも汲みあげておく作業を等閑視すると、地域住民の持続的な賛同が得られないことを考えねばならないのである。

そこで、本稿では、近年に「鰹乃國」としてカツオー本釣り漁業を中核とした地域振興に着手し、成功を収めている高知中土佐町久礼^{くれ}を事例にとして、その実施以前の基幹産業を捉えなおしてみたい。その場合、既刊の『中土佐町史』⁶⁾や『中土佐の歴史』⁷⁾などでは詳述されていない諸点とをとりあげる。

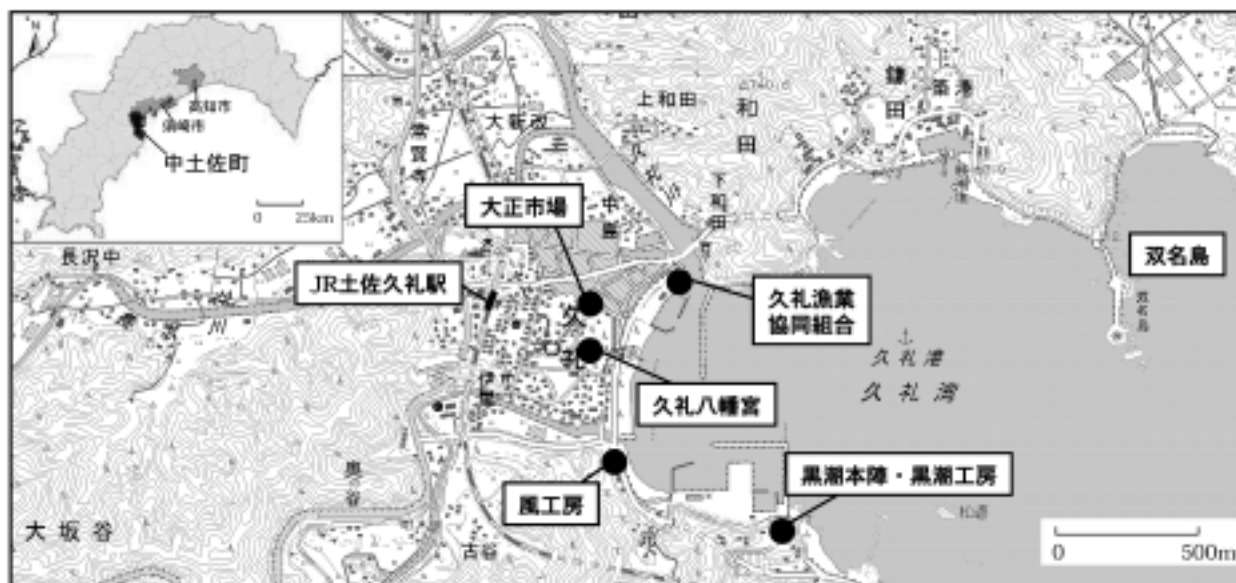
・高知県中土佐町の取り組み

1. 「鯉乃國」の沿革

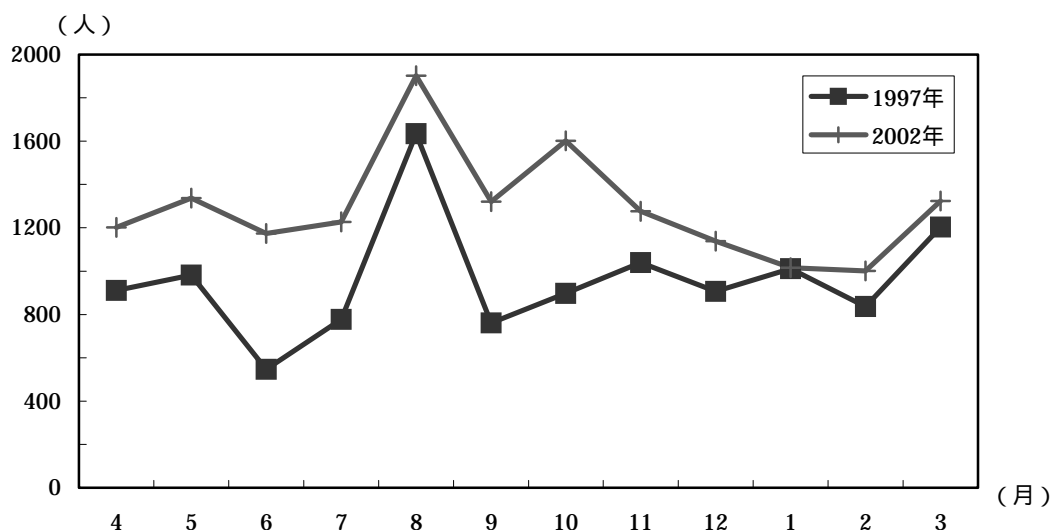
高知市と足摺岬の中間に位置する人口7,400余人の高知県中土佐町では、第1次産業の就業人口が約20%を占めている。そのうち漁業については、近世からカツオ一本釣り漁業が盛んに行なわれてきた。現在のカツオ一本釣り漁船は、近海を対象とする中型船と沿岸の小型船とに大別される。前者は、3月初旬から11月中旬にかけて台湾沖から三陸沖にまで日本海流に沿って北上するカツオを追い求め、太平洋岸各地の漁港に水揚げをしている。後者は3月から7月、そして9月から11月において土佐湾沖で1昼夜から2昼夜をかけて操業し、県下の漁港へ水揚げを行なっている。

必ずしも知名度の高くなかった中土佐町が全国的に認知されるようになったのは、一つの漫画と一匹（体）のカツオの登場を契機とする⁸⁾。1978（昭和53）年から1986（昭和61）年にかけて青年誌に連載された故・青柳裕介氏による『土佐の一本釣り』⁹⁾では、当町の久礼を舞台に主人公が一人前のカツオ一本釣り漁師として成長する過程が描かれている。実在の旅館や飲食店なども随所に登場したため、当町は「カツオの町」として、一躍全国に知られるようになったのである。また、1990（平成2）年のふるさと創生一億円事業では、町のシンボルとして純金のカツオが作成された。この事業は賛否両論をまきおこし、その見物に約33,000人が訪れた。さらに、1993（平成5）年にこの純金カツオが盗難あったことも、当町の知名度をあげることに繋がった。

しかしながら、1990（平成2）年4月に過疎地域活性化特別措置法による過疎地域に指定された当町は、町全体が活気を失いつつあった。人口減少・高齢化と漁業の衰退がみられた中土佐町では、1992（平成4）年から1993（平成5）年にかけて、久礼・上ノ加江・矢井賀からなる町内3地区と漁業・商業・農業などの各産業分野で活躍している住民による「町づくり小委員会」や、各業界団体の代表者による「地域振興懇談会」が組織された。そこでは、将来の町づくりに関する議論が活発になされ、カツオをテーマにした地域振興策が採られた。そして、1994（平成6）年4月より「黒潮のめぐみ体感プロジェクト」が着手され、温泉宿泊施設「黒潮本陣」¹⁰⁾、カツオのわら焼きタタキづくりの体験ができる「黒潮工房」が開設されたのである（第1図）。



第1図 中土佐町久礼のおもな観光施設



第2図 黒潮本陣の年別宿泊人数

(中土佐町水産商工課資料より作成)

こうした取り組みは、平成11年(1999)度過疎地域活性化優良事例として国土庁長官賞や、公共「湯の宿」料理部門グランプリなどを受賞し、大きな評価を得ている。宿泊客は開設後わずか10ヵ月で当初の見込みを大きく上回る1万人を突破し、夏季の宿泊稼働率は100%近くを示す。1997(平成9)年と2000(平成12)年とを比べると、夏季に集中していた宿泊客もほぼ通年に及ぶようになっている(第2図)。

大坂川河口の右岸(南岸)に位置する「風工房」は、イチゴ栽培農家を中心に組織された男性2名と女性6名からなる莓倶楽部が主宰するケーキショップである。1997(平成9)年12月に開業した当店で利用されるイチゴは、資源循環型を意図したカツオのアラなどの^{ざんし}残滓を堆肥としている¹¹⁾。これらの黒潮本陣 黒潮工房 風工房の3つの施設は連動した観光ルートになり、「到着後の温泉入浴 カツオのタタキで昼食 ケーキショップで休憩」という観光客の周遊パターンがほぼ確立されている。このような事業の成功によって、久礼大正町市場¹²⁾も活気を取りもどした賑わいをみせている。この市場は、わずか50mほどのアーケード街であるが、地元で漁獲されたカツオをはじめとする鮮魚や、アジやカマスなどの天日干しなどがところ狭しと並べられ、いわゆるお魚センターの役割を任っている。

2. カツオ祭りとかつオ・キャラバン隊

カツオ祭りは、毎年5月の第3日曜日に久礼八幡宮前の久礼海岸で開催される。この祭りは、1990(平成2)年のふるさと創生事業を契機に開催されるようになった。会場となる海岸には、1994(平成6)年4月に鰹供養碑、2004(平成16)年10月には故・青柳氏の石像が建てられた。ここで、カツオの大漁祈願と感謝・供養のセレモニーの後、中土佐町イメージソングの披露、トコロテン早食い競争やカツオ漁船への体験乗船、そしてメイン企画であるカツオの一本釣り競争¹³⁾が行なわれる。カツオ祭りへの参加者は、当初3,000人余に過ぎなかったが、年ごとに増加し、近年では約1~1.5万人にも及ぶ。

1996(平成8)年から開始されたカツオのタタキ実演販売は、「鰹乃国」の広告塔ともいべきキャラバン隊を結成し、中・四国地方だけでなく、関西や関東地方にまで出掛けている¹⁴⁾。キャラバン隊

は町役場、町商工会や鮮魚店などの関係者からなるボランティアで編成される。彼らは、「鯉乃国へ来てみや」などの文字入りの公用トラックにカツオとワラを満載して各地のイベント会場へ出かけ、自らがワラ焼きタタキを実演販売している。町役場職員については、課長自らが包丁を持ってカツオをさばき、勧誘の掛け声を発するなど、既成の公務員的な概念を打破した取り組みが展開されているのである。

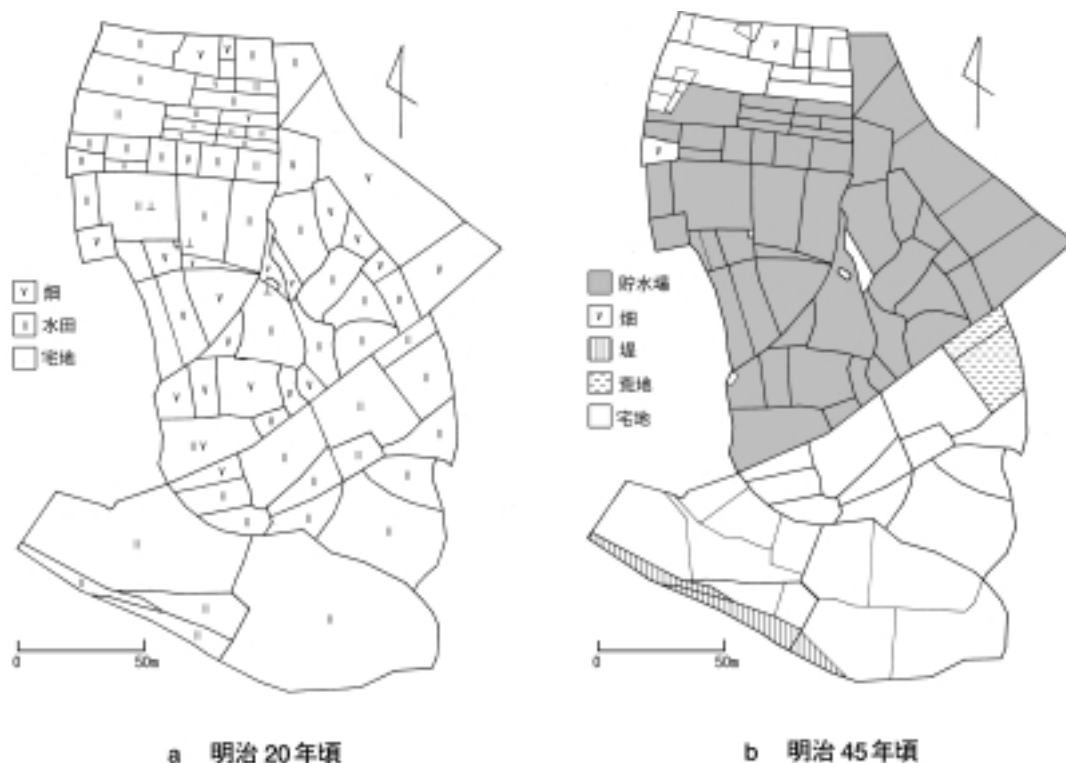
ところで、このカツオ祭りの会場や地域振興を担う中枢の役場周辺は、かつてどのように利用されていたのであろうか。『鯉乃国』の誕生前の地域的特徴のなかで、見落とされていたものがなかったものであろうか。次章で検討を重ねてみよう。

・木材の集散地

1．貯木場の展開

現在、中土佐町役場には1887（明治20）年頃に作成された地籍図と、その付属の土地台帳が所蔵されている。小字ごとに描かれた前者には、一筆単位に地番・地目が記されている。所有者とその地目の変化については、後者に記載されている。また、1965（昭和40）年頃には、後述する港湾周辺の整備のためか、新たに地籍図（公図）が編纂されている。そこで、これらの資料を比較することから、久礼の土地利用・所有者の変化についての考察が可能となる。

第3-a図は、1887年（明治20）年頃における大坂川の左岸河口付近、いわゆる伊屋地区（一部）の土地利用図である。北部は現在の中土佐町役場の建つ字中ノ通、中央部は保育所のある字宮ノ西、そして南部が大坂川河口部にあたる字イヤノ外にあたる。これをみると、中ノ通にはやや狭小な地



第3図 伊屋地区（字中ノ道・宮ノ西・イヤノ外）における土地利用の変化

（地籍図・土地台帳より作成）

筆の田が比較的整然と並んでいる。宮ノ西では、田のほかいくつかの畑も散見され、それらの地筆は中ノ通のものよりも広く、イヤノ外にはさらに大きな田が広がっている。なお、土地台帳に記された地価等級では、中ノ通の田は9～18等級、宮ノ西のものは12～27等級、そしてイヤノ外では21～27等級、およびそれ以下の荒田となっている。つまり、大坂川に近いほど地価は安価であり、土地条件は劣悪だったようである。

明治末期以降、ここには多くの貯木場が立地した。土地台帳によれば、その過程は以下のように要約される。1910（明治43）年、大坂川の左岸河口におけるいくつかの田は、それぞれの個人所有のまま森林付属地に転換を始めた。そして、1913（大正2）年になると宮ノ西を中心とするこの周辺の田は、ほぼ一斉に農商務省が管轄する貯木場へと転換したのである¹⁵⁾。先述の地価等級と対照すると、安価とはいえ土地条件のよくない荒田も広がるイヤノ外では、貯木場として利用するには土地改良の点において困難がともなったのであろう。具体的には、高知大林区署によって久礼町に隣接する大野見村島の川と松葉川村森ケ内などの国有林作業所から伊屋地区の貯木場へ木材や木炭が運搬された。そして、ここから海浜部まではトロッコが敷設され、それらは運搬船へ積み替えられたのである¹⁶⁾。前述したカツオ祭りの会場になり、鰹供養碑と故・青柳氏の石像の建つ海岸には、コンクリート製の栈橋の土台がいま残っている（写真1）。

1924（大正13）年に着工された須崎 久礼を最短距離で結ぶ海岸道路（久礼・安和間海岸道路）が、1930（昭和5年）に完成した。これによって、久礼貯木場への木材輸送が活発になった。また、北接する鎌田港（第1図）の重要性が高まり、一部の薪炭商が久礼から同港へ移り、町当局も公設荷物揚場を設置した。しかし、すべての港湾機能が鎌田港へ移設したわけではなく、営林局の木材の多くは貯木場からトロッコによって八幡宮前へ運搬され、この海岸から航送されたのである¹⁷⁾。

貯木場の展開をみなかったイヤノ外の南西部には、製材関連業が立地した。吾葉村吾ノ井郷の居住者の所有地に1922（大正11）年に創業された須崎製材株式会社は、1935（昭和10）年になると日本樽材株式会社へ社名変更し、翌年に久礼製材合資会社となるものの、1941（昭和16）年には再び日本樽材株式会社となった。1943（昭和18）年それは神戸市在住者の所有地となり、その後には所有権は転々とした。また、イヤノ外に東接する字宮林ノ南にあたる海浜部には、多くの木材倉庫が連立した。1913（大正2）年当時、この所有者は有限責任大坂信用販売組合であり、それは1933



写真1 久礼海岸に残る栈橋の土台

遠景に双名島が映る

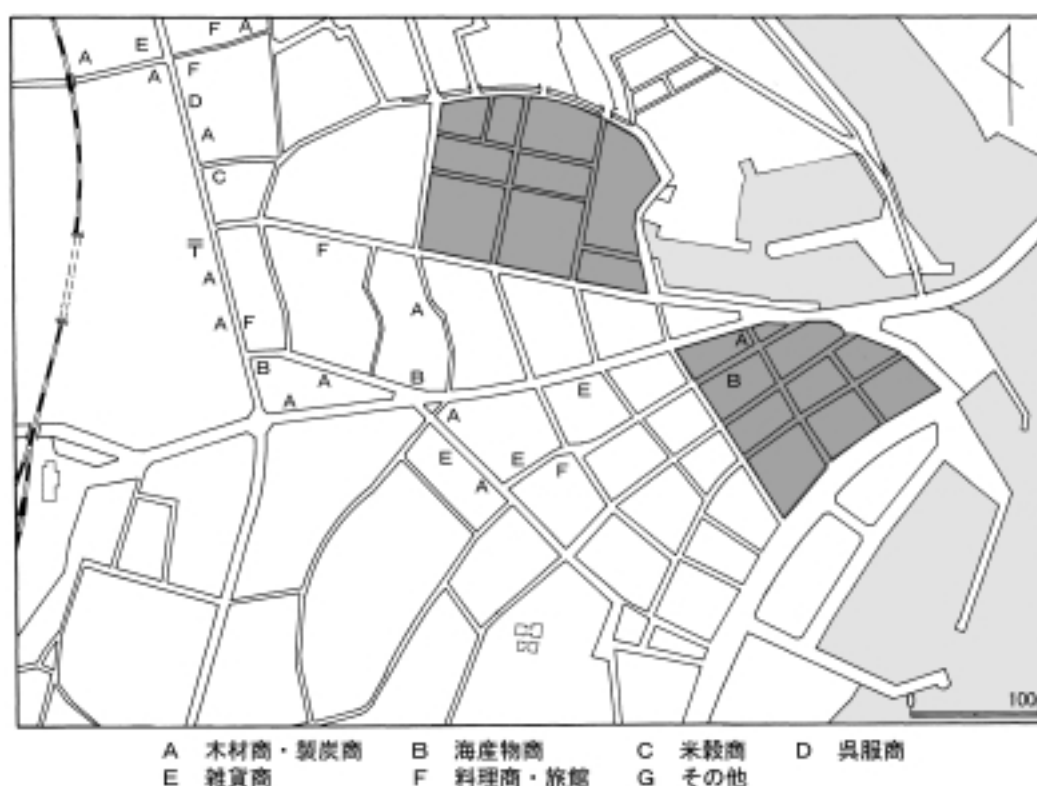
（2005年8月 石代吉史氏 撮影）

(昭和8)年には同信用組合へと組織変更された。このように、伊屋地区は当時の木材集散地の中心地として、その関連産業も付設していたのである。そして、それらは国家や他地域の人々によって担われていたようである。

2. 木材集散地と関連産業

木材集散地として重要であった久礼には、多くの貯木場だけでなく、さまざまな施設が立地していた。貯木場の敷設が始まる1918(明治43)年頃については、その前年に発行された『土佐名鑑』¹⁸⁾から久礼町に立地していた54軒の事業所が伺われる。これらのうち、兼業も含めて最も多い業種は木材・木炭関連業で、4割弱の15軒を数える。つまり、すでに当地は木材集散地としての機能を有していたようである。1908(明治41)年には、7事業所によって久礼町薪炭木材販売組合が結成され、やがて13事業所に増加したが、これは1910(明治44)年に解散した¹⁹⁾。木材・木炭関連業に続いて、他業種との兼業も含めた海産物取扱業、ならびに米穀商と呉服商が5軒ずつ、そして売薬商も3軒あった。なお、雑貨商と記載された事業所は合計15軒あり、それらは前記の米穀商や呉服商などと併記されている。つまり、当時の久礼の事業所は、専業への分化が不十分であったことを示している。3軒の旅館と5軒の料理屋からは、木材関連業者を中心とする顧客の存在も伺われる。

これらのうち、聞き取り調査によって所在地の判明した事業所を示したものが第4図である。木材・木炭関連業の多くは須崎方面から宿毛方面へと町内を通過する街道沿いのうち、海浜部へと分岐する本町通りまでの間に多く立地していた。なお、国鉄土讃線(現在のJR土讃線)が久礼まで延長するのは、昭和14年(1939)である。久礼駅開業によって、町の中心路は以前の本町通りから南方の駅前通りに移ったという²⁰⁾。しかし、明治末期には、すでに大正町市場への途中に、いくつか



陸域のトーンは、第5・6図に対応する

第4図 1907(明治40)年頃のおもな事業所の分布

(注8)ならびに聞き取り調査により作成)

の事業所が散見した。呉服商や雑貨商などの多くは、ここに立地していたようである。

農商務省の管轄による貯木場が立地し、外来資本の須崎製材株式会社の創業後にあたる1926（大正15）年については、『土陽新聞』に掲載された随筆²¹⁾からいくつかの具体的な事業所を知ることができる。当時、久礼町役場は城山山麓にあり、隣接して須崎区裁判所久礼出張所、久礼駐在所や小学校があった。そして、須崎営林署には5人の職員が勤務していたことも記されている。記述内容では卸・小売業の区別がやや不明であり、兼業もみられたものの、最も多く立地していた業種は15軒を数えた木材・木炭関連業である（第1表）。このことから、当時の久礼の中心産業が、木材集散に関わる産業にあったと判断できる。各1軒の立地しか確認できないが、樽屋や鍵掛屋なども関連する生業として見逃せない。続いては14件からなる雑貨商であり、そのうち6件は大正町に位置していた。そして米穀商（9軒）、旅館・木賃屋（6軒）、料理業（5軒）と呉服商（4軒）が続く。これらの高級品・買廻品店やサービス業が複数にわたって立地していたことから、木材集散地としての久礼は近隣地域を商圈に取り込み、関係者へのサービス産業も成立させていたようである。芝居小屋や散髪・女髪屋なども、同様の要因による立地と考えられよう。また、久礼八幡宮前での木材・薪炭などの積みおろしを担った仲仕のなかには、女性が少なくなかったことも特筆される²²⁾。

第1表 久礼におけるおもな事業所

1926年（大正15）		1957・58年（昭和32・33）	
木炭・木材	15	農業	91
雑貨商	14	漁業	45
米穀商	9	日雇・土建業	15
料理屋	7	林業	13
呉服	4	大工	12
裁縫店	3	製材業	11
酒類販売	4	製炭業	6
医者	2	飲食店	5
理髪店	3	仲仕	4
銀行	1	行商	4
風呂屋	1	船員	3
鍵掛屋	1		
樽屋	1		
芝居小屋	1		

1926年：注21） 1957・58年：久礼中学校所蔵資料より作成

2つの開発事業

1. 貯木場の跡地利用

1939（昭和14）年の国鉄久礼駅開業以降、木材の移出手段は船舶から鉄道へと徐々に移管していった。第二次世界大戦後、それはトラック輸送へと代わり、木材集散地としての久礼の機能も低下した。それにともない、高度経済成長期にはいり、久礼の住民の就業種にも変化が生じはじめた。1957・1958（昭和32・33）年の久礼中学校卒業生の保護者の職業をみると²³⁾、農業が最多の91名を数え、漁業の45名がそれに続く（第1表）。やはり、漁業が久礼の中心的な生業であったとは、簡単には断定できないであろう。農・漁業に対し、木材関連業では、林業の13名を筆頭に、製材業11名、製炭業5名、仲仕4名や営林署関係者2人が確認できる。先述した明治・大正期の職業構成に比べ、木材関連業の占める割合が低下している。それに対応するように、米穀業2人や旅館業1人など、かつての久礼に多くみられ、その地域性を示す職業はわずかとなり、呉服業に至っては該当者がいない。

1970（昭和45）年には、久礼駅での貨物取り扱いが停止した²⁴⁾。しかしながら、地籍図・土地台帳によれば、1965（昭和40）年当時においても、貯木場は広範にわたって展開していた（第3-b図）。これらの資料によれば、1972（昭和47）年以降に貯木場から雑種地への地目変更が始まっている。

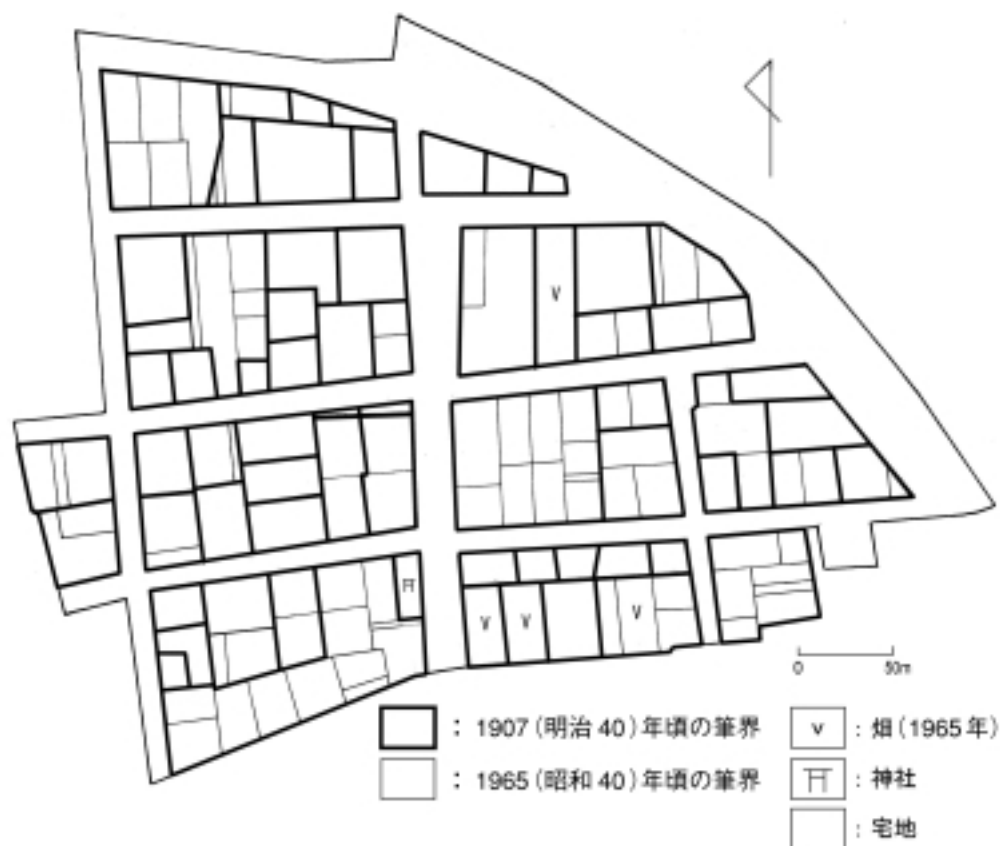
1986（昭和61）年に営林局から中土佐町当局へ貯木場の払い下げが打診され^{25）}、町制30周年にあたる翌年には、高知県土地開発公社がこれらを代行取得した。そして、1988（昭和63）年には跡地に町民交流会館とふれあい広場、平成元年（1989）には久礼憩いの家や文化館、そして高知県初の絵画美術館が完成した。さらに、その翌年に跡地は公社から町有地へと変換され、かつての貯木場は姿を消したのである。

2．久礼漁港の整備

伝統的なカツオ一本釣り漁業であるが、それが木材関連業に代わって久礼の中心的な産業となるのは、第二次世界大戦後まで待たねばならない。久礼港の防波堤工事は、1949（昭和24）年に起工され、1954（昭和29）年に完成した。また、久礼川河口では1948（昭和23）に導流堤を兼ねた防波堤、1954（昭和29）年には護岸堤の建設をとまなう船溜まり工事が始まった。これらが完成し、久礼漁業協同組合付近が整備されたのは1956（昭和31）年である^{26）}。

漁業そのものについても、さまざまな変化がみられた。戦後当初の10～20トン船によるカツオ一本釣り漁業も、やがて大型化が始まった。1963（昭和38）年の漁業取締規則改正によって、40トン未満の漁船による操業が自由化されると、久礼でも39トン型漁船の建造が相次いだ。1972（昭和47）年から1976（昭和51）年にかけて、カツオ一本釣り漁船は13隻を数え、久礼における同漁業種類の最盛期を迎えたのである^{27）}。

漁港周辺の整備とカツオ一本釣り漁業の盛況によって、久礼の居住地域に変化が生じた。漁業協同組合周辺の字下町は、1887（明治20）年頃には、わずかな畑地を残して、すでにほとんどが宅地化



第5図 字下町における土地利用と地割の変化

（地籍図・土地台帳より作成）



第6図 1970(昭和45)年頃の大宇南新改における土地利用

(地籍図・土地台帳より作成)

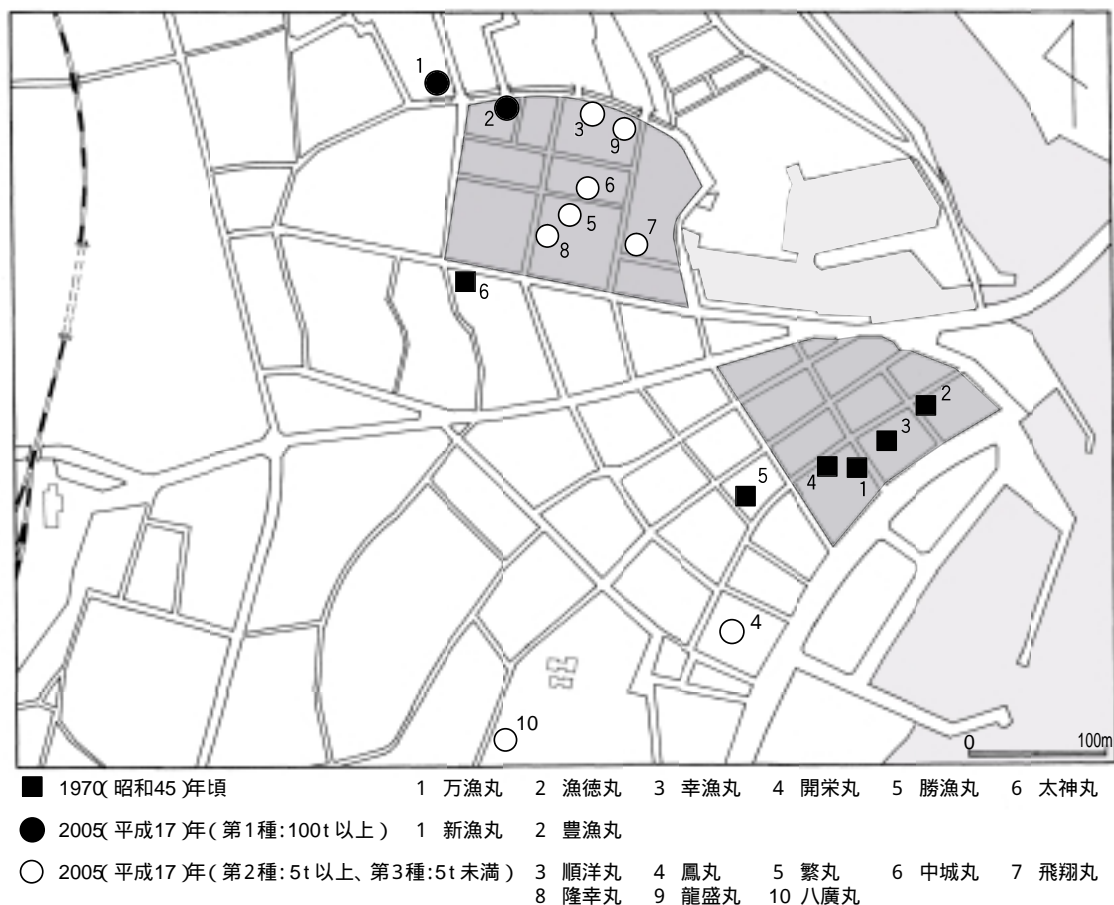
されていた(第5図)。その後、分家の創出をおもな要因として、分筆が繰り返されてきた。しかし、それも限界を迎え、久礼の人びとは久礼川河口部の字南新改に新たな居住空間を求めたのである。1887(明治20)年頃では、1筆の面積が大きいわずか2筆からなるこの小字では、1964(昭和39)年に須崎市の開発業者が土地を購入し、1970(昭和45)年頃に住宅地開発が始まった。第6図はその土地利用を示し、これをみれば雑種地へと地目変更された田が、やがて分筆されて宅地化されていく過程がわかる。さらに、航空写真(写真2)をみると、その様子を視覚的に理解することも容易である。字南新改に西接する字中島にある2軒の旅館も、当時の好景気によって開業している。



写真2 1970(昭和45)年頃の字南新改付近

東方の海上から望むと、開発以前のようすがわかる。

(中土佐町役場所蔵)



第7図 カツオー本釣り漁船の船長宅

(久礼漁業協同組合資料より作成)

下町の飽和状態と南新改の開発は、漁業者の居住地にも変化をもたらした。1970(昭和45)年頃、カツオー本釣り漁船の船主は6名ほど確認できるが、そのうち4名は下町、あと1人も隣接する上町に居住していた。それに対し、現在の10人の船主をみると、7人が南新改に居宅を構えているのである。何組かの血縁関係をはじめ、後継者はより広い宅地を求めて南新改に居住するようになった。そうでない場合でも、船主たちは新しく開発された南新改に居住することを望んだのである(第7図)。

なお、1970年代になると、久礼から継続的に香川県の栗島海運学校²⁸⁾に進学するケースが確認される。合計33名のうち、最初の進学者は1959(昭和34)年の同校の卒業生であり、1967(昭和42)年には3名、1972(昭和47)年と翌年には6名ずつ、1976(昭和51)年には5名の久礼出身が栗島海運学校から巣立っていった。彼らのほとんどは、卒業後に大手海運業社に就職し、なかには外国航路の貨物船・タンカーに乗船するものも見られた。木材集積地として、明治期には海運業の存在も確認できた久礼において、同業は伝統的な生業であり、それを選択する若者も少なからず存在したのである。

・おわりに 地域振興のあとに

本稿では、高知県中土佐町久礼において成功を収めている「鯉乃國」をめぐる地域振興を概説し、

その実施以前の地域性について、既刊の自治体史・誌で看過されていた資料から分析した。特に、木材集散地であった当地に広く展開した貯木場の変遷と、それをめぐる事業所や関係者について説明した。また、歴史地理学的アプローチから地域振興を再考することも試みた。つまり、国勢調査や農業・漁業センサスなどの指定統計類では等閑視される諸点を整理するように努めた。地域振興では住民が主役であるため、これらの資料からだけでは彼らの姿が見えてこないからである。

現在、進行中および計画中の地域振興策は、今後ともいろいろな場面で紹介されるであろう。しかし、カツオ一本釣り漁業が久礼を代表する生業となり、地域振興と結びついてより注目されるようになると、それ以前の生業が忘却されないとも限らない。鰹供養碑の眼前の橋脚にまでも想いが馳せられるには、現在の紹介板だけではやや困難かもしれない。それを補うためにも、例えばトロコ跡について道路を塗装することや、木材倉庫の活用などがあげられよう。また、「黒潮工房」で干物を焼くときに薪炭を利用し、かつての生業をアピールすることも考えられる。さらには、製炭そのものを体験することから始めてもいいのかもしれない。本稿で取りあげた中土佐町だけでなく、各地の地域振興策の採用とその実行にあたって、育まれてきた歴史と文化を看過しないことが望まれるのである。

付 記

本稿の作成にあたって、水産振興課課長・林 勇作様をはじめとする中土佐町役場、久礼漁業協同組合や久礼中学校など高知県中土佐町久礼の皆様方に大変お世話になりました。そして、「鰹乃國」という地域振興で成功を収めた当地をご紹介いただき、現地でも有益なご助言をいただいた愛媛大学農学部・若林良和先生と東寝屋川高等学校・増崎勝敏先生に深謝いたします。また、本学との高大連繋プログラムのテストケースとして、生徒とともに現地調査に参加していただいた平安高等学校・石代吉史先生にも感謝いたします。

末尾ながら、資料整理を手伝ってくれた立命館大学大学院文学研究科地理学専攻の南 紀史君、同文学部地理学専攻の村上富美さんと藤信有蔵君にお礼申し上げます。

注

- 1) 半場則行「農山村における基幹産業の衰退と地域振興 福井県大野郡和泉村の場合」, 人文地理 43-6, 1991, 566 ~ 582 頁。
- 2) 半場則行「日本における地域振興の展開」, 地理 40-1, 1995, 112 ~ 117 頁。
- 3) 前掲 1)。
- 4) 筒井一信「中国地方の過疎山村における一地域振興の実態分析 内発的発展論におけるチェックポイントを用いて」, 人文地理 51-1, 1999, 87 ~ 103 頁。
- 5) 中山昭則「自然休養村事業による観光振興と地域の活性化 山形県飯豊町中津川地区を例にして」, 人文地理 52-4, 2000, 372 ~ 384 頁。
- 6) 中土佐町史編さん委員会編『中土佐町史』, 中土佐町, 1986, 1 ~ 1163 頁。
- 7) 中土佐町史編さん委員会編『中土佐町の歴史』, 中土佐町, 1986, 1 ~ 243 頁。
- 8) 中土佐町の地域振興については、以下の報告に詳しい。 崎山義澄・川島昭代司・林勇作「鰹乃國・高知県中土佐町は元気いっぱい! カツオを主人公にしたまちづくりの担い手たち」21世紀フォーラム 85, 2003, 38-45 頁。 若林良和「カツオで地域おこし!! カツオの地域資源化とネットワーク形成の重要性」, 四銀経営情報 65, 2003, 1 ~ 16 頁。本章では、これらの文献を参考にした。
- 9) 青柳祐介『土佐の一本釣り(全25巻)』, 小学館, 1978 ~ 1988。この漫画は、1945(昭和20)年に高知県で生まれた故・青柳祐介氏の代表作である。中土佐町では、2001(平成13)年8月9日に享年56歳で逝去し、名誉町民であった氏の追悼集を発刊し、筆者も寄稿する機会を頂戴した。拙稿「描かれた風景、伝えたい魂」, 中土佐町編『故・青柳祐介に捧ぐ鎮魂歌』, 中土佐町, 2003, 所収), 55 頁。

- 10) 「鯉乃国の湯宿」と呼ばれる中核施設の「黒潮本陣」は1996年12月にオープンし、宿泊、温泉、鮮魚料理と、太平洋の眺望を提供している。当館は土佐の漆喰と、魚梁瀬の杉、土佐の和紙をふんだんに使用した純土佐風の宿泊施設で、本館には和室11室があり、別荘コテージ5棟も併設されている。
- 11) ただし、現在では水耕栽培が中心であるため、カツオの残滓はほとんど利用されていない。
- 12) ここに市が立ちはじめたのは明治中期であり、当時は地蔵町と呼ばれていた。1915（大正4）年の大火で市場の多くを消失したが、その後に大正天皇から復興費用が届けられたために、町民が感謝の意を込めて地蔵町から大正町と改称した。
- 13) これは3人1組で1人ずつ順に海岸より道板を渡り、イカダの組まれた釣り場で素早く玩具のカツオを釣って元の位置に戻ってくるリレーで、タイムとパフォーマンス度、そして観客の熱狂度を競う。
- 14) 2001（平成13）年度では愛媛県吉海町、香川県引田町、岡山県高梁市・倉敷市・寄島町・有漢町・川上村、島根県松江市・安来市、鳥取県米子市、東京都、群馬県前橋市へ赴いている。前掲8），8頁。
- 15) 貯木場倉庫については、『土陽新聞』、大正3（1914）年3月30日（中土佐町教育委員会事務局編『中土佐町史料 土陽・高知新聞他』、1983、中土佐町教育委員会、24頁、所収）に、以下の記述がある。なお、数字表記は一部を改めた。「第並連建。第1号木造平屋掘建杉皮葺にして、(中略)その建坪106坪2棟、長さ 間、横4間二棟2号木造平屋掘建杉皮葺、その建坪240坪6棟、長さ10間、横4間にして1月20日起工し、目下竣工に近づきつつあり」
- 16) 前掲6），536～537頁。
- 17) 前掲6），580～581頁。
- 18) 東村傳之助・十萬達吉編『土佐名鑑』、土佐名鑑編集部、1909、314～318頁。この資料には、高知県の市町村ごとに、業種・屋号・経営者・電信記号（電略）が列記されている。編纂内容や掲載基準がやや不明確であるものの、当時における県下の事業内容をミクロレベルで把握することができる。本稿の主旨に促せば、久礼町の全事業所については機会を改めて紹介したい。
- 19) 前掲6），493～494頁。
- 20) 竹内理三編『角川日本地名大辞典 39 高知県』、角川書店、1986、1262頁。
- 21) 森下高茂「久礼町の繁栄」、土陽新聞、1926（中土佐町教育委員会編『中土佐町史料 土陽・高知新聞他』、1983、中土佐町教育委員会、62～71頁、所収）。なお、この随筆では各事業所の立地場所が旧地区名で付されている。本稿では詳述しなかったが、前掲6）同様に本稿の主旨を鑑みた場合、機会を改めて紹介したい。
- 22) 前掲7），122～124頁。
- 23) 保護者のほとんどは父親であることから、当時の久礼における詳細な職業構成について知ることが可能である。ただし、いわゆる年子の場合、同一の保護者がダブルカウントされている可能性は否定できない。
- 24) 前掲7），124～125頁。
- 25) 『高知新聞』、昭和61（1986）年6月18日（中土佐町教育委員会事務局編『中土佐町史料 中土佐町関係新聞記事集』、1995、中土佐町教育委員会、202頁、所収）
- 26) 前掲6），640～644頁。
- 27) 前掲6），667～668頁。
- 28) 1897（明治30）年に日本最初の地方商船学校として、香川県栗島に栗島村立栗島海員補修学校が設立された。戦後、同校は栗島海員養成所として改組され、1952（昭和27）年には国立栗島海員学校になった。しかし、長期の海上生活を送る職場環境に魅力を感じる若者が激減し、日本の海運会社は安価な賃金でフィリピンをはじめとする外国人船員を大量に雇用するようになった。そのため、日本各地の海員学校の縮小・統合が進められた。4,000余名の卒業生を輩出した同海員学校も、1987（昭和62）年にその歴史に幕を閉じた。拙稿「香川県・栗島における基盤産業の変容 海運業から養殖業へ」、（平岡昭利編『離島研究』、海青社、2005、所収）、97～112頁。

（本学文学部助教授）

The Regional Characteristics Prior to the Establishment of “Katsuo no Kuni (Land of Skipjack)” at Kure in Kochi Prefecture, Japan: The Consideration of Regional Promotion Measures

by

Norifumi KAWAHARA

This paper takes the example of Kure at Nakatosha-cho in Kochi Prefecture, which has succeeded in the local promotion of “Katsuo no Kuni (Land of Skipjack)” centered on skipjack pole-and-line fishing, and reviews the key local industries prior to the implementation of this plan.

In 1992, Nakatosha-cho adopted a local promotion policy on the theme of Katsuo (skipjacks). Then, in 1994, the town opened a guest house in called “Kuroshio Honjin” and places where people could try skipjack cookery. Before World War II, however, Kure had developed as a trading center for wood products.

In 1910, the rice paddies at Iya area in southwestern Kure were converted into lumberyards under the jurisdiction of the Noshomu-sho (Ministry of Agriculture and Commerce (before World War II)). Lumber and charcoal were transported from national forest worksites to Iya area. They were transported from there a trolley line that had been laid to the seashore, and transferred to cargo boats. A look at the types of business in Kure at that time reveals that the most common were those related to lumber and charcoal, followed by marine products, rice, dry goods, and inns.

In the 1970s, the flourishing skipjack pole-and-line fishing industry and development around the fishing harbor brought changes to the residential areas of Kure. The saturation of the old town and development of Minamishinkai at northwestern Kure also produced changes in the fishermen's residential areas. The owners of skipjack pole-and-line fishing boats began to move to newly reclaimed are land.

In selecting and implementing regional promotion policies, it is desirable that the history and culture that has been cultivated in the region not be overlooked.